

真実一路

奥村 一郎

前号、「ある挑み—自然消滅—」の流れをうけて、さらに、その核心に迫る話題をとりあげてみたい。

1 托鉢と荷車

いくつかの事柄が重なりあった話題なので、紙面の都合上要約させていただく。

かなり昔のことになるが、機峰駿烈な禅風で知られた京都の禾山^{くわさん}禅師のもとで雲水修行をしていたひとりの禅僧にかかわる逸話である。六人の雲水とともに老師が托鉢に出ておられたある日のこと、坂道にかかったところで、重い荷物を山ほど積んだ荷車を引いて急な坂を登りあぐねている人に会った。ひとりの雲水が思わずすうと托鉢の列から出て車を押してやった。その時、フトそれに気づかれた禾山老師は、すぐに托鉢をやめて、ひとりでさっさと寺に帰ってしまわれた。そして、直ちにその雲水に下山を命じられた。下山というのは、禅門における最も厳しい追放の罰である。カトリック教会での破門のようなもの。車を押して人助けをしたのに、どうして、そのような厳罰が与えられなくてはならないのか、他の道友たちも分からず、深く同情して、せめてその理由だけでもと老師に懇願した。老師は毅然として言われた。

修行の身であるものが、人の車に気をひかれるようではどうする。山門から叩きだせ。

しかし、その雲水もさるもの、山門の脇に坐り通して後、やっと独参のゆるしだけ、いただいたという。

「己事究明^{こじきやうめい}」の「専一行^{せんいつぎよう}」に徹する禅修行の面目躍如たるエピソードである。

さて、京都の花園大学の西村恵信教授が、米国留学中、禅修行の特色を見事にあらわす話題としてキリスト教の一派であるクエーカーの信者たちにこのエピソードを伝えた。すると、全く期待はずれ。異口同音に、禅修行を手厳しく批判してきたため、西村禅師は弁解のすべもなく戸惑ってしまった。困っている人を助けることこそ、宗教者のとるべき態度であり、禅の修行精神は、全く非宗教的、非人間的であると、

クエーカーの人に徹底的に叩かれた。まさに、「禅キ衝突」の正念場。

ところで、この話にはさらに第三幕がつづく。世界的に著名な、故鈴木大拙博士が、しばらく帰国されたある日のこと、先生を囲む食卓で、西村教授が、米国での例の痛い体験についての思い出を話された。そのとき、大拙先生は、いつのまにか目をふせ、涙をおさえるようにして言われた。

「いや、そんな筈はない。いくらキリスト教徒でも、この老師の慈悲が分かんわけではない」と、西村教授の話を強く否定された。

ここで、西村教授はまたさらに当惑。そこまでの話のいきさつを、「老博士の涙」と題して、教授は『鈴木大拙全集』の紹介文の中で書いておられる。

遠いある処での、ある人の、全く目立たない、数分の小さな出来事が、水面に投げられた石がつくりだす波紋のように、人から人へと語りつがれて、今は、カトリックの修道者のわたしにまで及ぶ興味深い、連続ドラマのような話である。西村教授が、「とっておきの話」と前置きして話してくださったのもうなずける。教授は、さらにコメントする。

「禅者の立場からする慈悲は、暖かさや優しさと思わせる他者依存の甘さではなく、非情の情、突き放しの精神であり、自律の要求であり、与えるものではなくて、根本所有を自覚させるものである」と。

宗教の対話というよりは、「対決」ともいえるこの貴重なエピソードは、わたしにとっても、「とっておきの話」になった。「愛(アガペー)」を生命とするキリスト教に真っ向から対立する禅的修行態度は、確かに、どのキリスト者にとっても、クエーカーの信者と同じように、全く不可解なもの。否、非難されるべきものと言うしかない。

この衝撃は、禅キ両者を否応なく分裂させ、対話や交流の道を全く塞いでしまうものなのだろうか？隣人愛、人類愛を説く聖書の根底にあるものは何なのだろうか？

2 マルタとマリア (ルカ福音書10章38～42節)



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会・カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンス宗教研究所)など多数。

一必要なものはただ一つ—

イエスがある村に入られると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタはいろいろのもてなしのため忙しく立ち働いていた。それで、イエスに近寄って言った。「主よ、わたしの妹はわたし一人にもてなしをさせていますが、何とも思われませんか。手伝うように言いつけてください」と言った。すると、主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに心を配り、思い煩っている。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを彼女から取りあげてはならない」。

この逸話も、一寒村ベタニヤでの、ほんの小さな出来事である。上記の「托鉢と荷車」の話にも似ている。細部についての解釈はまちまちであるが、「必要なただ一つのもの」というのは、キリスト自身にほかならない。さらにいえば、「いつ、どこでも、キリストとともにいること」である。その死の直前にキリストは祈る。「父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を彼らに見せるためです」(ヨハネ17, 24)。

禅者が「己事究明」の専一行に全身全霊を投入することは、キリスト者が、いつどこでもキリストとともに死に、キリストと共に復活する生き方にその全存在を賭ける殉教にも似ている。キリスト教の本質は、「教え」でも、いわゆる「宗教」でもない。たえず、キリストと共にある現実を生きることによって死を超えることにある。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたたちと共にいる」という、マタイ福音書を結ぶキリストの言葉には千金の重みがある。

キリストに召された弟子のひとりが、「主よ、まず、わたしの父を葬らせに行かせてください」というと、「わたしに従え。死者は死者をして葬らせよ」と、キリストは命ずる(マタイ8:21~22)。さらにもうひとりが、「主よ、わたしはあなたに従います。しかし、まず、家族にいとまごいをさせてください」と言えば、「鋤に手をつけてから、後ろをふり向く者は、神の国にふさわしくない」とも言い切るキリスト。(ルカ9:61~62)

イエスが愛した二人の姉妹の女性らしいトラブルの場面では、優しく姉マルタを戒めながら、きっぱりとキリストは言う。「マリアはよい方を選んだ。それを彼女からとりあげてはならない」

禾山老師は、小さな自己満足にもなりかねない目の前の人助けよりは、すべての人の救いがかかっている「己事究明」の禅修行に徹することの重要性を説く。キリストは、いつ、どこにあっても、また、何をしても、キリストと共にあることの至上の価値を教えようとする。いずれも、人間の常識の枠を破り、凡俗な良識に挑む。徹底した脱自の境地なくして、真の慈悲行はないことを禅者は知っている。そこでは、ガンよりも悪質な我執への挑戦が、何よりもまず求められる。安易な慈善を拒絶することは、上記に見るキリストの姿勢にも躍如として現れている。我欲の肥満児となってしまった現代人の死に至る病を癒やす力は、絶えまない自己放棄による自己超越の道しかないという教えがそこにある。

わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者はそれを失う。わたしのために、自分の命を失うものは、それを救う。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失えば、何の得があろうか。自分の命を買いもどすのに、どんな代価が支払えようか。

(マタイ福音書16章24~26節、マルコ福音書8章34~36節、ルカ福音書9章23~25節)



Kozo Miyoshi CACTI Landscapes

三好耕三

10.1 tue - 11.15 fri, 1996

10.11 fri = 臨時休館

フォト・ギャラリー・インターナショナル

月一 金 11:00 am — 7:00 pm

土, 日, 祝 休館

phone 03 3501 9123

P.G.I. 芝浦

吉田友彦 作品展 Tomohiko Yoshida
「砂山の砂 : chrome yellow」

10.8 (Tue) — 11.8 (Fri) 1996

月一 土 11:00 am — 6:00 pm

第2, 第4土曜日, 日, 祝 休館

10.11 (金) 臨時休館

phone 03 3455 7827

PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL